

Adult
R18 only

クラウド
・ノイズ





ドドド

ザッザッ

アッ!

あ、

ほお、
ずきッ……!

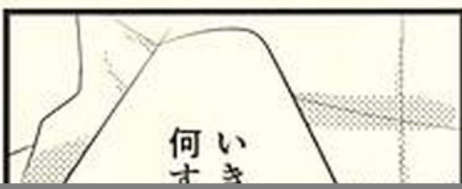
あっ、

あぁ!

はっ、

あっ、ん!!

ほおず、











—あなた、たの

……ッ

んアッ!?

あっ

ちょ、
はくた…

急にッ

あッッ…

聲を…
聞かせて…

乱暴なのは
やめて
下さいよ…!

…ばか。

これ以上
煽って
どうすんの？

サラ…

(はッ…)

(はッ)





あつ、あつ、あつ……

んん、んん、んん……

やあ……

は……

は……



アッ、アッ、ひっ！

や……

あつ、あつ、あつ……

も、わたしッ……！



限界きてたんでしょ？
イッていいよ

今日の
ほおずき

今までで一番
啼いてくれて
嬉しいな……

あ……
ゴメン、ね？

ゴム、
ナカで破け
ちゃった……

強く振り
過ぎたみたい
……どうしょっか？



あつ、
いい、
ですから、

もっ……！
もう、ア……

ふふっ……
かあわいい……

ねえ、
気持ちいい？
奥がイイでしょ？

は……いつ
ああう……





ちゃんと…
掻き出して
くださいよ

…えっ!!

さ、させて
くれるのっ!!



ん?
どしたの?
疲れちゃった?

…痛いのは、
嫌いなんです



キィッ!!



貴方の
声がないと
なんて

どれほど
絆されて
いるんだか…



ああ…、
縁がぶっくり
腫れちゃってる…

大丈夫?
痛くない?
擦りすぎたかな
ゴメンね…

あつ、
あつ、
あつ、えろい…

えろ過ぎて
つらい……

お前の紅い
お尻の孔から
僕の白い
たっせー

やっぱり
黙れ!!

いたいッ!

おしまい。

薄暗く、微かな明りに照らされた体はしつとりと汗ばんでおり、鍛えられたほどよい筋肉を纏った胸が乱れ整わぬ呼吸に合わせて上下に揺れるのを、白澤はじつと見つめた。

「…っ、見てんじやねえぞ…豚」

白澤の腹に跨る体はけして柔らかくないし、漏れ聞こえる声は低い。それに加えてこの口の悪さだ。

到底、白澤の好む女とはかけ離れた男に、しかしながらこうして体を合わせ内の欲を吐き出せるというのは、この男に情があるということなのだろう。

「せつかくお前が乗っかってくれてるんだもの、見なきゃ勿体ないじゃない！」

先ほどから息を上げ、己の腹に手をつき、必死に腰を浮かす鬼灯の動きはぎこちない。なんとか頑張って快楽を求めているが、自ら押し込むことに抵抗と恐怖があるのだろう。

ぎゅうつと眉間に皺の寄った彼に、思わず笑みを溢せば、それは別の意味となつてさらに深く刻まれた。

「ふ…う、貴方が、あ、乗れと…」

ああ、機嫌を損ねてしまった。

白澤がごめんね、と背中を丸めた鬼灯の脇腹へと手を伸ばし、優しく撫でてやれば、ひくりと体が震え両の眼にたまった滴がぼたりと落ちた。

ちらりと横目で見た時計は事を始めてからすでに日をまたいでおり、この体勢に持ち込んでからイけぬままかれこれ30分以上は経過していた。

しかし白澤は自らも吐き出せぬ状況でありながら、鬼灯の動きに口をはさむ事もなく、ただ寝そべって見上げていただけで…

「…は…はくた…さ…」

「まだ、頑張れる？」

ふるふると首を横に振る鬼灯の背を撫で、ゆっくりと体を起こし涙に濡れた顔を覗き込む。

桜色に染まった体は限界が近いのか震えており、白澤の肩に置かれた腕はもはや力を込めることも出来ならしい。

「この体勢ってさ、一番好きに気持ちいいところにあてられるんだよ？もっと好きに動きなよ」

「は、あ…無理です。疲れ…」

「まあ、何回もやったあとだしねえ」

それにいつもは白澤が腰を振ってばかりで、鬼灯が動くことなどなかったのだから、ここまでよく頑張った方だろう。

動くことをやめたことで、とろりとした両の眼はすでに眠気を感じているのかも知れない。そう言えば徹夜をしたと言っていた。

このまま彼をイかせてやり、休ませてあげたい気持ちもあるが、如何せん元氣な愚息はもちろん、精神的にも満足はできていない。

ましてや下腹部はまだ鬼灯の温かな肉に飲み込まれたままで、目の前には虚ろな瞳と薄く開いた唇から零れる熱い息が頬を掠めているのだ。

この状況で我慢など無理に等しい。

「っは…も…いき、た…」

いきたい、いきたくないどちらかは聞き取れなかった。

過酷な労働後、大した休息もとらず、こうして何時間も体を重ね、白澤によって何度も吐き出すことを強制され、すでに出るものはほとんどない状態。それでも休むことは許されずこうして自ら腰を振っているのだから：

「約束破った罰、でしょ？」

ほらもうちよつと頑張つてと体を軽く突き上げてやれば、鬼灯は声を上げて体を大きく反らした。

そう、これは数か月忙しさを理由にメールの一本送つてこなかった鬼灯に怒った白澤が提案したこと。

「今日だけは好きにだけさせてよ」

と。しぶしぶながら了承したのはやはり申し訳ない気持ちがあったからで、それに働き過ぎる鬼灯を本当に心配していたのを分かっていたからだ。

かといってこの状況には少々後悔しているのも目に見えてわかる。

いつも如何に手加減されていたかも思い知ったこと

だろう。

「ほら、満足したらやめてあげるから頑張つて」

それはまだ男が全く満ち足りていないということもあり、そのことに気がついた鬼灯が意地になり再び自ら動こうと息を整えた、が。

急な下からの突き上げ。

反応できず、喉を大きく反らした胸に噛み付くように唇が押しあてられ、指先が鬼灯の胸の尖りを抓り、自身を掴まれ扱かれる。

たまらず腰を浮かした鬼灯を無理に引き戻せば、あまりの快感に男の引き締まった体が何度も耐えきれず痙攣した。

「んん!!ぐっ…あ、あ!!!」

びくり、びくりと鬼灯が跳ねるたび、震動が響いて気持ちよい。

「まっ!だめで…」

ひゅーひゅーと肺の空気が抜けていき息苦しいのに気持ち良すぎて声を抑えられないのだろう、白澤の首に腕を絡めた鬼灯は普段の彼からは想像もできないような声で啼き、それを自分だけが見ているという状況

が堪らなく欲を誘った。

「はっああ!!は、く…」

反り返った鬼灯を無理矢理向き直させ、閉じられなくなった唇を重ねれば脳に直接声が響くような感覚。

二度、三度と軽く触れてから舌をねじ込み、歯裏をなぞってやればそこが気持ちいいと、けれど善すぎて耐えられないと、背中を叩かれた。

無視してさらに口内を犯し、喉の奥近くまで差し込んで彼の舌の根を押えて啜る。

びちゃびちゃといやらしい音が響き、息苦しさが限界に達した鬼灯の体が弛緩していく。

その様子がまるで死に行く者のように見えて…。

——このまま息の根をとめてしまってもいいかもしれない

だって幸せだから。

まさに息も絶え絶えな男は、今なら簡単に殺されてくれるのではないだろうか。いつかは自分をおいて行ってしまいかも知れないこの鬼を、今自分だけのもの

にして思い出とともに眠ってしまえたら、こんなに幸せなことはないだろう。

酸素を求め、逃れようとする後頭部にしらず、力が入る。

そのまま力の抜け切った鬼灯の体を少々乱暴に押し倒し、更に深く口付ける。

「ん！んんっ!!」

自身を含んだ穴がひくひくと激しく痙攣したのが伝わり、我に返った白澤が唇を解放し身を起せば、顔を真っ赤に染め、全身を震わせている恋人の姿。

「あ：鬼灯：」

慌てて抱き起し、頬を撫でれば、虚ろだった鬼灯がゆっくりと白澤を捉えた。

「：あなた：今、すごく怖い顔、してました：」

「：ごめん」

まだ息の整っていない鬼灯を抱きしめ首筋に顔を埋めれば、少し荒れた無骨な掌が白澤の髪をゆっくりと梳いていく。

その温かさに、じわりと涙が滲んだ。

「貴方は神様なのですから：そんな顔、似合いませんよ」

「うん：ごめん」

ぎゅっと抱きしめれば、息を必死に整えようとするのが伝わり、申し訳なきに何も言えなくなる。

放置されて寂しかったなど、まるで子供のようない由で好き勝手に暴き、わからない未来に怯え大切な存在である筈のこの鬼に、あらぬことをしでかした。

あまつ、優しさに泣く自分はここまで情けない男だったのかと。

「なにが、そんなに不安ですか？私ではやはり貴方を幸せにできませんか？」

「：一番がお前になって：僕はどうしようもなく寂しくて、一人、になるのが怖くなった」

「：」

違う、これでは鬼灯を責めていることになる。

言ってしまった失言を、今さら取り消すことなど出来ず、さらに力を込めて抱きしめる。

「私は：いつ飽きられてしまうかと不安ですよ」
髪を梳く手を止め、鬼灯は言った。

「貴方は自由で、そんな姿に憧れて、それが悔しくて

わざと喧嘩を吹っ掛けて、でも貴方は無視せず私と喧嘩してくださいました……」

今度は鬼灯が、しつかりと白澤の体を抱きしめる。

「貴方が飽きるまでは、そばに……」

ああ、互いが互い不安を押し殺してきたのか。自分だけが一人を恐れていたわけじゃなかった。そのことがうれしくて、視界はあつという間に滲んで。

繋がたまの体から引き抜けば鬼灯が震え、啼く。

戸惑っているのが見えて、腕を引き、安心してもらえるようにとそっとキスをした。

「泣き虫ですね、おじいちゃん」

表情が変わらなくても、喜んでくれてるのがわかる。泣き笑い、うるさいよと返せば今度は鬼灯から唇を合わせて来たのを受け止め。

そうしてしばらく互いの唇を貪って、放した時にはもう涙は止まっていた。

「無理、させてごめん」

どろどろに汚してしまったことを謝り、今日はもう休もうかとベッドから降りる。

「立てる？お風呂いこう。無理だったら体拭くから……」

水も持ってこなきゃ」

無茶を強いた分、しつかりと休ませなければ、そうして明日しつかり寝かせてあげて、たっぷり美味しいものを食べさせて……

などと考えていた白澤の腕がぐいっと強く引かれ、視界が回った。

あつという間の出来事で、再びシーツの柔らかい感触に包まれても、腹を跨ぎ見下ろしてくる鬼灯の姿を見ても何が起こったか理解ができない。

「まだ、終わってないでしょう」

そう言って腰を浮かせた鬼灯を慌てて止める。

「っ！今日はもういいよ!!」

欲しい言葉で満たされた。

気持ち伝えても、鬼灯は止まらない。

白澤の腹を跨ぎ、少し萎えてしまった自身を鬼の手がゆるゆると扱き、そうして白澤の目の前で辛いといった、それでいて満たされた顔で飲み込んでいく体。

「く……あ……貴方だけが求めて、っ思わないでくださいね……はっ」

両の手が白澤の体をベッドに倒す。

ゆっくりと上下に動き始め、べろりと赤い舌が覗くのがやけに艶めかしく、見たこともない、誘うようなそれでいて動くことを許さない視線に、カッと顔が熱くなるのがわかった。

それに気がついた鬼灯が耳元に唇を寄せる。

「気持ち、いいですか？」

と。

「つつ！」

ギョツとわざとらしく締め付ける内部に、耐え切れず声を上げた白澤を、満足そうに見下ろしていた鬼灯の体が跳ねた。

「ちよ！はく…？や!!」

まるで貫いてしまうかの様な衝撃に、腹に置いた手では体が支えられず。思わずバランスを崩した体はがっつちりと白澤に支えられたが、これでは自ら動くことができない。

鬼灯は揺らされながら、余計なことはするなと睨みつけたが、眼下の男の鋭い視線と、与えられた快楽に結局は押し負け、何も言えなくなってしまった。

「せっかく、さ、もう休ませて、って思ったのに!!」

「あ、はっやめ！」

「やめない」

そのまま、鬼灯の視線が反転し、あつという間にひっくり返され視線にはよれたシート。

腰を高く上げさせられた獣のポーズのまま、さらに白澤が責め立ててくる。

シートをぐっと握り、一度一度の衝撃に悲鳴をあげて。

「も！だめ、です!!あつあつ！」

耐えきれぬ涙がポロポロと溢れ、声は抑えようもなく、それでも必死に愛しい男に声をかける。

そこにちゃんといえますよね？とでも言うように。

だから白澤も答える。

名を呼んで一番だと伝わるように。

右腕を引き強引に向かい合い唇に噛みつけば、鬼灯が震え、達したのがわかった。

「は・・・ああ・・・ん、ん！」

ぐったりと沈み込むのを許さず彼が息苦しくない程度の愛撫を繰り返し、息の整わない身をしっかりと抱くと白澤は自分の欲を受け入れてもらうために律動を再

開させた。

もはや悲鳴に近い鬼灯が可哀想ではあったが、しかし自分も限界がちかい。

「…ごめ…」

とまれないなんてまるで餓鬼のようである。

口だけの謝罪なんて口にするだけ無駄であろう、目の前の恋人はもういやだと頭を振ってヤメテくれと訴えているというのに…

「いつ!! あああ!!!」

「っ! ほお…き…」

逃げ出そうともがく体を押さえつけ、全て彼に流し込み、白澤はようやく彼の体を解放した。

ゆっくりと目を覚ます。

窓からの光は明るく、そう言えば今日は満月であったな、と窓の外を見ようとカーテンの隙間を少しだけ広げる。

大きく明るい月の光は案外眩しいもので、街灯などなくとも歩けるほどである。

ああ、この疲労感さえなければ散歩にでも出かけられるのに。

それくらい、いい気分であったのだ。

無理をした体はくたくたで、腕を動かすのも億劫でそれでも満ち足りた気持ちで…窓から視線を外し、すやすやと眠る男へ視線を落とす。

「…ふふ…アホ面、ですな」

髪をかきあげれば現れる神の印

鬼灯はゆっくりと眠るあどけない神様に覆いかぶさり、唇を落とした。

「そばに置いてください…」

そう、貴方が世界に飽きてしまうその時まで。

